



西側正面の車寄せと銅葺屋根が印象的な3階建ての和風建築



奥書院北側の畳廊下。庭の花木が南を向いて咲くことが計算されて北向きに。ベルギーから取り寄せたガラス越しに庭園が楽しめる。



西側正面の車寄せの庇部分。袴型に垂木が並べられている。まるで彫刻のような意匠からも、確かな技術がうかがえる。



高い天井で広がりのある奥書院。壁は名人が11層も塗り重ね、関東大震災でもヒビが入らなかったという丁寧な造り。

伝統技術と大工技術の創意が融合した
震災でびくともしない頑強な住宅建築

緑豊かな景観が残る東京・文京区小石川に、山林王で知られた磯野敬氏の自邸として建てられた木造3階建て、近代和風建築の住宅です。1912(大正元年)年に完成。屋根と外壁を銅板葺き、銅板張りにしたことから通称「銅御殿」とも呼ばれ、関東大震災や戦災もくぐり抜けた東京に残る数少ない邸宅建築の一つです。

伝統的な木造建築の技術と明治の大工の創意を融合させた建築は、2005(平成17)年に国重要文化財に指定されています。

社寺建築の手法が
住宅用アレンジされ
取り入れられた「銅御殿」

小石川の湯立坂に面した正門は、尾州檜の太い丸太材を柱に用いた四脚門。屋根を支える太い丸太は、檜の風合いを出しながらも耐久性を高めるために一度焼きされています。屋根裏は均一の丸太が垂木のように整然と並べられ、流線型の屋根は重厚な中にも、軽く見えるようにデザインされたものです。

門をくぐり奥に進むと、銅板で葺かれた屋根の一部が見えてきます。社寺建築で見られる箕甲納め(※)の印象的な屋根は、竣工当時には光り輝いていたと言います。

旧磯野家住宅は、中央の3階建ての応接棟、東側の平屋建ての書院棟、北側の平屋建ての旧台所棟で構成。応接棟は、1・2・3階に応接間が配置され、それぞれ客を迎えることができるよう配慮されています。

書院棟は、畳廊下と板廊下に囲まれた座敷が東西一列に並び、奥から床・棚付書院を設けた座敷(奥書院)、次の間、さらに押入れを介して控えの間と続きます。各室の性質が保たれるよう配慮されています。旧台所棟は、台所を中心に洋室、和室、浴室などで構成されています。

築100年。
寸分の狂いもなく建つ姿が示す
耐久性の高さ

旧磯野家住宅は、建築に当たって「寺院風で地震と火事に強いこと」を望まれたことから、耐震性を考慮した木組みとし、屋根は軽い銅板葺き、外壁も銅板張りとする事で耐震性、耐火性を高めています。また、書院棟と応接棟・旧台所棟を独立して組むことで、地震による損壊を広がりにくくしています。完成に8年を費やしたと言われる銅御殿は、御蔵島産のクワ、ベルギーから輸入した微妙な凹凸のある板ガラスなど、資材の調達から設計施工仕上げのすべてにおいて独創性と確かな技術が発揮されています。棟梁の北見米造氏は、書院造りや茶室にも造詣が深く、多様な窓の形式や障子の組子のデザインにもその影響がうかがえます。

邸内で随所に展開される建材・建具は、木の美しさを積極的に活かしており、訪れる人の目を楽しませてくれます。大震災、戦災を経た100年の旧磯野家住宅が、いまだに寸分の狂いもなく凛として建つ姿は、当時の技術水準と木造住宅の耐久性の高さを十分に物語っています。

※箕甲納め(みのかさめ) 切妻屋根の妻側の端の納めを、襖をかぶせたように丸みのある円弧状にしたもの。



応接棟の階段部分。踏み板を弧状にして、上りやすさとデザイン性を兼ねている。



応接棟2階の天井部分。神社仏閣の天井を模したもの。ケヤキの自然な節穴を四隅に配すことで、板厚を見せて換気も兼ねる。



応接棟3階部分。幾何学模様のような組子の明かり取り窓。



釘が1本も使われていないと言う、四脚の大門。流線型の屋根が厚い板扉を風雨から守っている。

